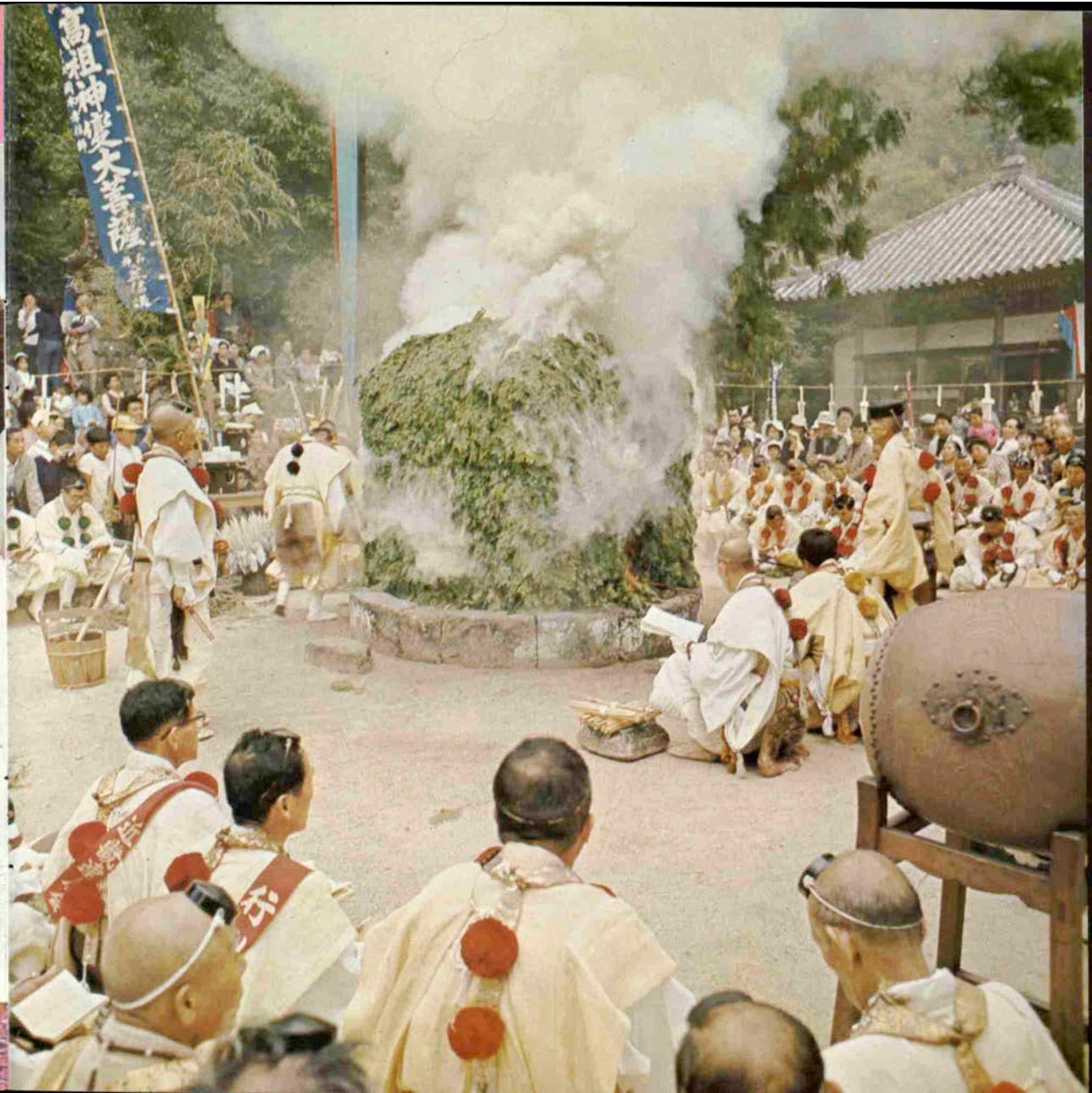


山伏の採燈大護摩法儀



●るほるたーじゅ 北神戸をゆく(12)

# 伽耶院の「大護摩法儀」

黒部 亨△作家△

播磨路や伽耶のみ寺のはなの庭

てらすは法のひかりなりけり  
新西国二十六番詠歌にうたわれている大谷山伽耶院がやいんは、天台系の修驗道寺院、すなわち山伏の寺として名高く、三木市志染町大谷にある。神戸の西北約二十四キロ、志染県道より東北へ二キロはいった谷にあり、前後

を山に囲まれた秘境は、山伏の修業場として最適の環境

となっている。

孝徳天皇の勅願寺として大化元年(六四五)法道仙人を開基として建立された。古くは大谷山大谿寺おおだにじといい、天和元年(一六八一)に後西上皇から勅により伽耶院の称号をたまわった。以来二百有余年、聖護院宮院家として廟を修驗界にふるうことになる。

伽耶院の最盛期は平安中期。

当時は堂宇數十、坊塔は實に百三十余といわれ、

花山天皇の行幸を仰いだ

こともあるが、天正六年

(一五七八)から八年に

かけて秀吉の播州三木攻

めのとき、衆徒が別所方

として羽柴勢に反抗した

ため、一山ごとごとく兵

火にかかるて焼失した。

したがつて現在約四千余

坪の寺域内にある諸堂

は、慶長十五年(一六一

〇)の金堂再建を皮切り

に、明石城主小笠原忠

政、姫路城主池田輝政な

ど、諸侯の寄進によって復興されたものである。

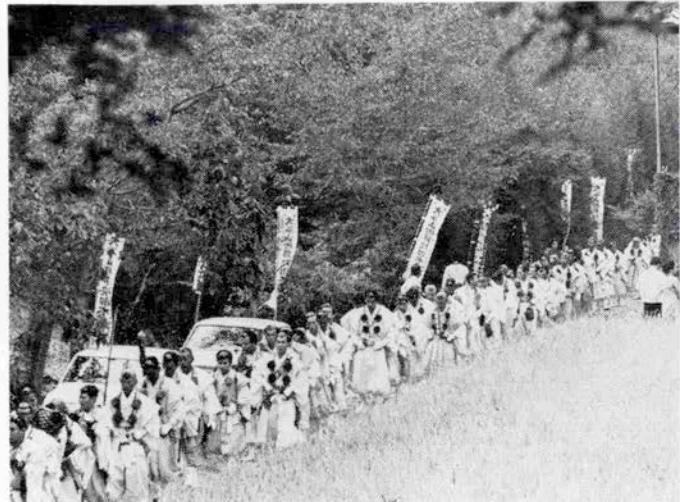


全員そろっての山伏の読経。

れる単層寄棟造本瓦葺で兵庫県指定文化財。藤原時代末期の作といわれる本尊の毘沙門天木像は重要文化財。本堂東側にある鎮守三坂社は三間社流造一間向拝付で、その構造の精緻、手法の巧妙、形態の壯嚴さは、慶長年間の建築美をあますところなく表現している。もちろんこれも兵庫県指定文化財である。

ところで、伽耶院といえば、年に一度執行される採灯大護摩法儀が何といってても有名で、大勢の山伏が参集して近畿地区最大の行事が行なわれる。毎年十月十日に催されるのは、天和元年のこの日に後西上皇から伽耶院の称号をたまわったからである。

午前になると、伽耶院の境内は山伏姿の修験者たちと、この珍しい行事をひと目見ようと遠路はるばるやつてきた参観者たちでいっぱいになる。外人家族の姿も見える。さつと百五十人の山伏が畿内各地から駆せ参じてゐる。年輩者がほとんどだが、中に十代の少年山伏の姿も見えるし、女性も二人ばかり混つてゐる。



山門を出てから一列に並んで本堂へ向う山伏たち

その服装は、歴史ものの映画やテレビでおなじみの、義経、弁慶の東北落ちのいでたちと思えばよい。はなやいた衣装の山伏たちが、樹々のわずかに色づきかけた境内のあちこちに屯ろして、さながら映画撮影所のスタジオにまぎれこんだような気分である。

山伏とは、山野に起臥して修行するところから「山臥」とも書く。また政治・軍事に関係したところから「山武士」ともいう。山岳宗教と仏教との混合宗教とみなされ修験道の行者の別称で、山家と在家を問わず、山岳や社寺の修行者を一般に総称していいる。修験道の開祖は役小角。天台山伏と真言山伏の二派があり、伽耶院は天台系である。吉野の大峰、金峰、熊野三山などの靈山で独特の修行をする。周知のごとく山上が岳は大峰行者の修行の中心で、山上には本堂、鐘掛岩、東ノ覗岩、西ノ覗岩など、巨岩の絶壁を利用した行場が多く、古くから信仰登山が行なわれた。

山伏の服装は独特である。出家でも有髪のまま袈裟、鉢懸、兜巾を着けている。法螺、念珠、錫杖、笈のほかに、山野の歩行に必要な縄、斧など、いわゆる十二道具を持つ。腰にクマやタヌキの皮でつくった引敷をぶらさげている。僧がケモノの皮を身につけているのは奇妙だが、これは濡れた地べたに臥すときの敷物として好都合なのだ。伝説によると文殊菩薩がイノシシにまたがつたらしいといわれているが、要するに深山幽谷を旅する行者たちにはざぶとんがわりの実用品で、昔はカモシカの皮をつかつていたという。

午後一時、いよいよ儀式がはじまった。

庫裏の庭に整列した山伏たちは、「總礼」を終えてから一列に並んで山門を出、法螺貝を吹きながら本堂の方へ登つて行く。この場合、階級の低い者が前になり、経験の深い者はどうしろに並ぶ。下位先進といつてゐる。

山伏の階級ははつきりと分かれられていて、胸に四つ、背に二つ着けている房の色によってそれが示されている。



導師をつとめる伽耶院の岡本孝信師。出世大先達である。

の入口で双方とも威儀を正して行なわれる。たとえば……

答者（旅の山伏）案内申、  
ふ、承け給ふ。

問者 旅の行者、住山何れな  
りや。

答者 本道場に於て天下泰  
平、五穀成就、祈願の大護摩供ありと承はり致せ

参ぜしものにて候。同行列座に加へられんことを  
の義、御心得ある筈。当道場の掟として一通りお  
尋ね申さん。

答者 何なりと御答へ申さん。

この階級は、△峰入り▽の度数と密教修法を重ねること  
によって上位に進むという独特的の仏教教義をもっている  
若くて上位の者もあれば、老人でも下位の者がいる。

行列の先頭は準先達（みず色）で、△大峰入り▽を三  
回経験した人である。以下、先達（みどり）、大先達  
（黄）、直參（茶）、參仕（紫）、出世大先達（赤）とい  
つたぐあいで、出世大先達になるためには四十数回の大  
峰入りを経験し、あるていど年功を経なければならな  
い。なお、山伏の階級は腰にまいている貝緒（ローブ）  
の色によっても示されている。

本堂の前で△本尊お勤め▽の儀式がすむと、つぎは  
△入道場▽で、山伏たちは護摩を焚く結界の中にはいつ  
ていく。方形の結界は石で囲まれ、その石が腰掛けにな  
つていて、山伏たちはその上に桧の葉を敷いて腰をあら  
す。中央に石造りの円型護摩壇がある。

入道場のとき、有名な△山伏問答▽が行なわれる。山  
伏たちは乞食山伏、つまりニセ山伏をいちばん忌み嫌  
う。旅の山伏がやってきた場合、それがほんものかニセ  
物かを問答によってたしかめ、合格すれば道場へ入れる  
し、不合格なら門前払いをくわせてしまう。問答は道場

問者 そもそも山伏の二字、その義は如何に。修驗道

の義は如何に。

答者 山伏とは真如法性の山に入り、無明煩惱の敵を  
降伏するの義。修驗道とは、修行を積みてその驗  
徳を顯はす道にて候。

問者 修驗道の開祖は如何に。

といった具合で、合格すると「しからばお通りめさ  
れ」となり、法螺貝を吹き鳴らして道場にはいり、仲間  
に加わる。

護摩壇には、百五十貫もの桧の青葉を積み上げた、高  
さ二メートルもある護摩木が組み立てられている。本来、  
丸太十六本で組み立てるが、細い丸太三十二本で組み立

てるのもあり、中にシバを入れて燃えやすくしてある。これだけ作るのに三人がかりで一日半かかるという。護摩とはもとサンスクリットのホマ（焼く、焚く）のこと。智慧の火で煩惱の薪を焼きつくすことを意味する。

今日の導師をつとめているのは伽耶院の岡本孝信師（78）で、むろん出世大先達。その子息道夫さん（36）が、マイク片手に参観者に解説する。高校の先生だけに、修驗道の歴史的背景、山伏の生活と修行、さまざまな儀式の意味など、わかりやすく解説してくれる。

あとで同氏にいろいろご教示を願う。

何といつても山伏にとって最大の修行は、大峰山の「奥駆け」である。大峰山といえば、現在では一部禁制を解いてはいるが、古来女人禁制の修驗道場として名高い。お山があくのは五月から九月まで、その期間中は全国から山伏の集団が大勢やってくる。

「日帰りもできますが、奥駆けとなるとちょっと苦行でしてね。わたしも何回か行きましたが、吉野、大峰山

上、弥山、前鬼と、峰づた

いのコースを四泊で歩くんです。大峰山上から弥山まではが険路でしてね。足がガクガクして歩けなくなりますよ。山伏たちは『ヒザが笑う』といつていいますがね』

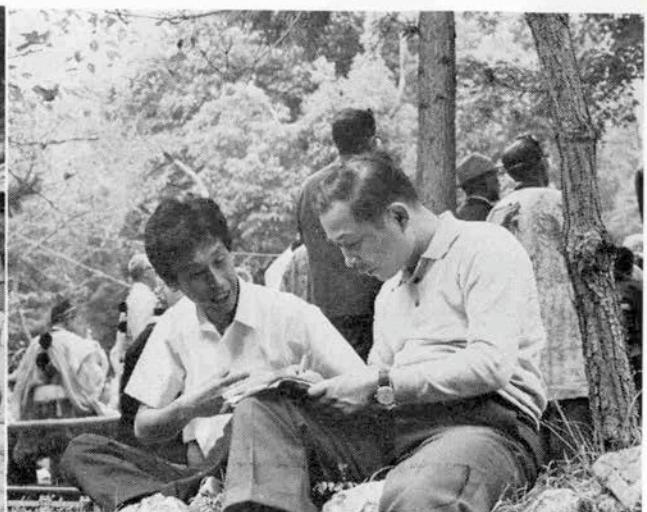
吉野から新宮まで、紀伊

山脈を二十一日間で縦走するコースもある。文字通り難行苦行で、朝は三時起床、四時出発。午後一時まで峨々たる山中を歩きづめである。

握り飯をほおばり、谷水



山伏の吹く法螺貝の音が境内に力強く響きわたる



伽耶院の岡本道夫さん（左）から取材中の筆者（右）

を飲み、山に臥し、岩をよじ登り、クマ笹を分け、六根清淨を唱えながらひたすら自己を凝視する。すべて自分ことは自分でし、人の力に頼らない苛酷な自己鍛錬である。夜は必ず護摩を燃いて煩惱を焼きつくし、六時には夜露に濡れながら岩蔭や樹蔭にまどろむ。体力のほかに強固な精神力を要するゆえんである。



大護摩法儀には、点火までにいろいろむずかしい儀式がある。

まず△法弓の作法▽がはじまる。法弓師が祭壇に進んで弓をとり、採灯師に一礼して護摩壇にむかって法弓の文を唱える。それが終つてから東、西、南、北、中央、鬼門の六方角に、それぞれ法弓の文を唱えてから白羽の矢を射放つ。道場を穢す悪魔を追い払うためである。

つづいて△法劍の作法▽が行なわれる。法劍師が護摩壇にむかつて剣を抜き、「光」という文字の形に空を切

る。法劍の文にもあるように「般若ノ靈三摩耶形ノ利劍トナツテ一切衆生ノ諸々ノ戯論煩惱ノ敵を絶」するためである。  
つきが△斧振りの作法▽である。斧師が掛け声もろとも大斧を振る。これは「採灯ノ薪ヲ執り、供養洗浴ノ水ヲ求ム」行事で、「壇木小木一切ヲ授与シ悉地成就セシメ給ヘ」と祈る。

それがすむと導師の願文朗読があつて、いよいよ点火。山伏全員の読経とともに、桧の青葉がパチパチと音をたてて白煙をあげはじめる。境内に詰めかけている何百人もの参觀者たちは、儀式のクライマックスを迎えて、厳肅な表情で眺めている。火はそれらの人々の煩惱や穢れを潔めながら燃えあがり、境内に聳える樹々の梢から空へと流れしていく。

一見、格式ばつた儀式の連続である。しかしその底を流れている精神は、深山幽谷の中で厳しく、しかも謙虚に自己を浄化していくこととする人間のねがいにほかならない。大自然の神秘は、人間の六根（眼、耳、鼻、舌、身、意）に生ずる穢れや醜さを、苛酷なまでにあばきだしてくれる。燃えさかる護摩の火を見ていると、物質文明に毒された現代人にこそこの火は必要なのであるまいか……と、そんな感慨にとらわれる。

やがて山伏は退場。こんどは上位先進で庫裏に帰り、ここで再び総礼をして大護摩法儀はつづがなく終了した。山伏たちが去ると、参觀者たちは結界の中によびこんで桧の葉を護摩壇の火の中に投じて身を淨める。

恒例のモチまきがはじまつた。

煩惱を焼きながらつい果てるともなく燃えている火の上を飛んで、白いモチが人々の頭上にアラレのように落ちてくる。

嬉々としてモチを拾っている老若男女の面上には、心なしか心身を淨めたあのすがすがしさがあふれているようであった。



護摩の煙を浴びながら一心不乱に祈る老婆

美しい時計をつくり続けてきました  
スイスで1791年から……

No.9015 ステンレス側 35,000円  
金張側 35,000円



## ジラール・ペルゴー

永久に正確な時を刻むジラール・  
ペルゴー。香り高い芸術の気品  
をしのばせるデザイン。世界に誇る  
スイス時計の逸品です。

GIRARD-PERREGAUX

特約店  
 美甲時計店

元町店・元町三丁目 TEL.331-1798  
三宮店・さんちかファンシー・タウン TEL.331-8798

●ブラジル独立150周年記念

# 新制作座 第2回 ブラジル訪問帰国公演

於／神戸国際会館・12月18日 午後6時開演



フィナーレ後の真山美保団長のあいさつ



新制作座ブラジル公演のフィナーレ後の交歓風景（ブラジリアで）

真山美保さんの「新制作座」が、ブラジルで公演をするきっかけとなつたのは、兵庫県出身の日系コロニア（移住者）である弓場勇さんの一通の手紙からだ。弓場農場では、そこで働く娘さん達にバレエを教え、労働と芸術とが一体となつて、弓場さんのバレエを実践してきた立場から「ブラジルの日系コロニアは今、文化を必要としている。それには人の心をゆさぶる演劇が必要だ。ここは处女地だから良い種をまかなくてはいけない。そのためには、真山さんの指導をあおぎたいし、新制作座がぜひ来てほしい」という内容だった。初め弓場農場から三人が日本へ来て、芸術集団と生活集団の交流が地球の裏と表で始まった。次には新制作座から一昨年、二人が二ヵ月調査にブラジルへ渡ったが、日系人が七〇万人もいて驚いたという。去年の七・八月、泥かぶりを持ってのブラジル公演は大成功。

そして今年は、ブラジル独立一五〇周年記念とあって、フェスティバルの『人間万歳』を持って七、八月に、二十七カ所四十回の公演を行ない、はじめて真山美保さんも参加し、熱狂的な歓迎をうけたのだ。

この作品は、真山さんが人間で書くドラマ、劇場の中でつくりあげてゆく形式をとつてフェスティバル『人間万歳』と名づけられた作品で、オープニングはお江戸日本橋や荒城の月、第二部は日本の四季をテーマにした叱られて、雪の曲（杵屋六郎助作曲）木曾節や阿波踊り、さらなどを唄と踊りとお芝居でつくりあげ、ファナーレをブラジルのファベーラ（貧民窟の唄）シラビマラビリヨン（美しい街リオの唄）オレレ・オクラなどを本場仕込みで見せるという構成だ。雪の曲にふる雪景色、月夜の海の場面など内容ともに風物が非常に喜ばれたそうだ。

神戸では、十二月十八日この『人間万歳』を帰國公演として上演する。神戸とブラジルは、移民基地でもあり、日伯親善の交流は伝統的にも根強い土地。どのような日本を紹介し、またどのようなブラジルを吸収して、はつらつとした舞台を見せるか楽しみである。

# ボランティア

橋 本 明

シアトルの一番街とチャーチ通りの間にある、ロウマ・ビルの中に「シアトル・ボランティア・ビューロー」がある。これはその名の通り、ボランティア、すなわち地域の中の社会福祉施設や病院、学校などで自分から進んで奉仕活動をする人たちのための窓口であるが、最近同じ名前のオフィスが日本の各都市にも設けられるようになったので名前だけはご存知の方も多いと思う。

このボランティア・ビューローとは一体どういうものであるかを知ろうと思って私は十一月のある日、ロウマビルの七階の一室を訪れた。

六疊ぐらいの小さな部屋には机とソファー、それに本棚ぐらいしかない。しばらく待つていると体格のいい、快活なジョアン・ラルセン夫人が部屋に入るなり私に握手を求めて手をさし出した。彼女がこのディレクターである。非常に愛想がよく、人を引きつける魅力の人だ。いろんなボランティア・ディレクターに会つてみて私が感ずるには、このラルセン夫人を初めとしてみな非常ににこやかで、何となく人を引きつける魅力をもつているということである。数多くの多種多様なボランティアをオーガナイズし、思い通りに動かすにはやはり統率者たるディレクターには高い指導力が要求されるのであろう。

このラルセン夫人の説明によると、ボランティア・ビューローの役割は、簡単にいえばボランティアと各社会福祉機関の間に立つて両者の交流の調整をすることである。

ボランティアの募集や訓練などは各施設や病院で独自で行うことがあるが、それでは手間も時間もかかるのでこのボランティア・ビューローがそれをまとめて定期的に行い、一人一人のボランティアに合った施設を間に立て紹介したり、施設が必要とするボランティアを斡旋したりする。ビューローでは双方のニードに敏感に応じるために、シアトル市内でボランティアを必要とする施設、学校、病院などの一覧表を作製し、どの施設でどんな仕事のできるボランティアを必要としているかが一目瞭然にわかるようにし、たえず双方のニードを満たす努力をしている。

現在シアトル市内の約九四%の施設や病院がビューローを利用しておらず、その数は六〇%以上にもなり、働いているボライティアは五万二千人にもものぼる。一口に五万二千人といつても、シアトル市の人口が約六〇万人だから十二人に一人は何らかの方法で奉仕活動に参加していることになる。今さらながら活動の層の厚さに驚くほかない。ボランティアの主体はやはり学生と家庭の主婦であるが、六十五才以上の老人で余生を奉仕活動に生かしている人達も多く、半数以上の施設で老人がボランティアとして働いている。

日本でも家庭の主婦でこのボランティア活動をしたいという人が最近増えてきたが、どこに行けばそれができるのかかいもくわからず、働きたいという気持はあってそれを実行にうつせない人は多い。しかも日本の福祉施設や病院ではボランティアを受け入れている施設は少なく、あつても散発的なもので長期にわたるボランティアプログラムはもつてないのが実情といえる。したがって今後日本でこのボランティア活動をひろげていくためには、まず今述べたように働きたいという気持をもつ



「あなたを必要としている人達がいます！」とよびかけるボランティア・ビューローのパンフレット

に役立つであろうというプラスの面をかんがみて、施設経営のプログラムの中にさしつかえない限り取り入れていく努力をしていただきたいと思う。

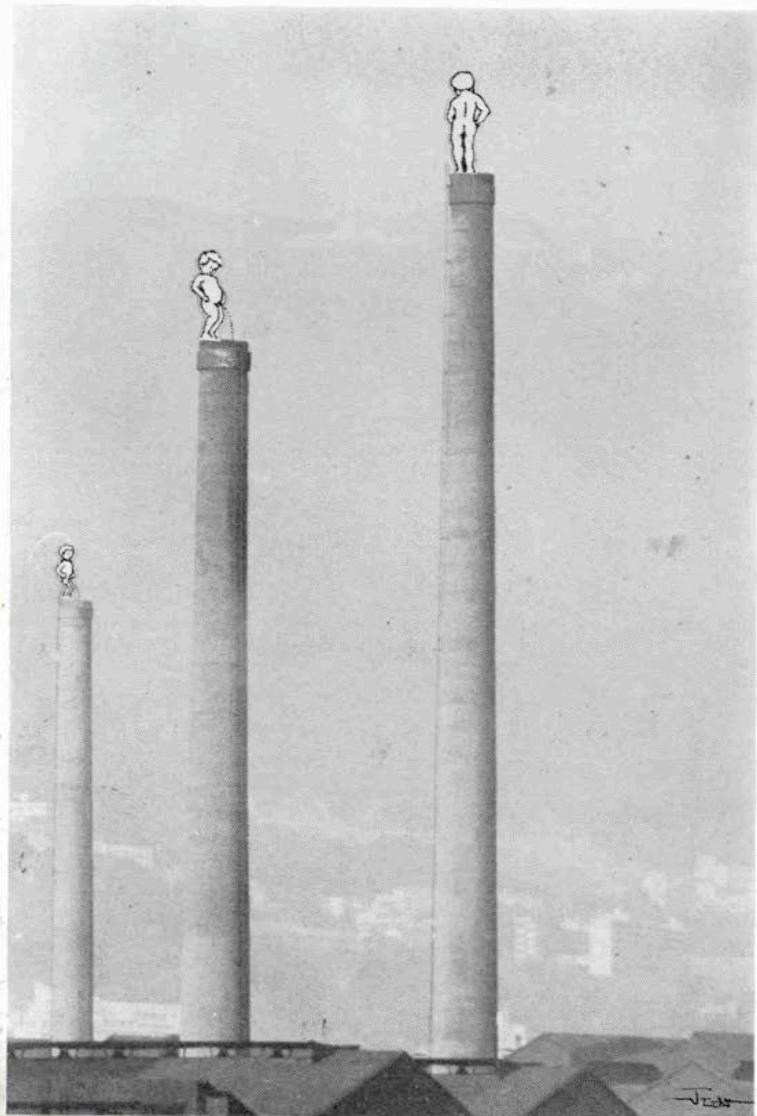
余暇時代を迎えて日本でも週休二日制の企業が増えつつあり、労働第一主義から余暇を楽しむ時代へと人々の価値感も少しづつ変りつつある。家庭の中で、あるいは仕事の中で増えた自由な時間を利用して、一ヶ月に一度でもどこのかの施設へ奉仕活動に出かけていく時間を日常生活の中にとり入れることができたら日本の社会福祉もだいぶ変わっていくことだろうし、人生の何時間かを障害者と共に過ごした経験はその人の長い人生に何らかの形でかならずプラスになるに違いない。

ヨーロッパのいくつかの国では結婚前のお嬢さんにある一定の期間施設や病院で奉仕活動をすることを奨励し弱い人達に接することによってお互いに助け合って生きることの尊さを学ばせるようになっている。こうした一種の花嫁修業は将来彼女たちが家庭の主婦となり、母親となつた時、立派な家庭をつくるための礎ともなり、子供の教育においても大きなプラスとなっていく。

日本でもこのところ二、三の県の学校では社会科の実習として生徒たちに障害者の施設や老人ホームなどへ出かけていて社会奉仕活動をさせているところもある。

学校の正規のカリキュラムの中に社会奉仕活動を組み入れて、若い時から障害者や老人に接する機会をもつことは大切なことであるし、「社会福祉」という科目を授業の中に加えて基礎的な知識を教えていくということもこれからは必要になつてくるであろう。

アメリカのように若者から家庭の主婦、さらに退職後の老人までもが生活の一部として奉仕活動を行うようになるまでにはかなりの長い時間がかかるであろうし、果して日本でそれだけの幅広い活動が可能であるかどうかはわからない。しかし、少くともこれからそういう方向への努力をつづけていくことは日本の社会福祉のレベルアップのためにも必要なことであろうと思う。

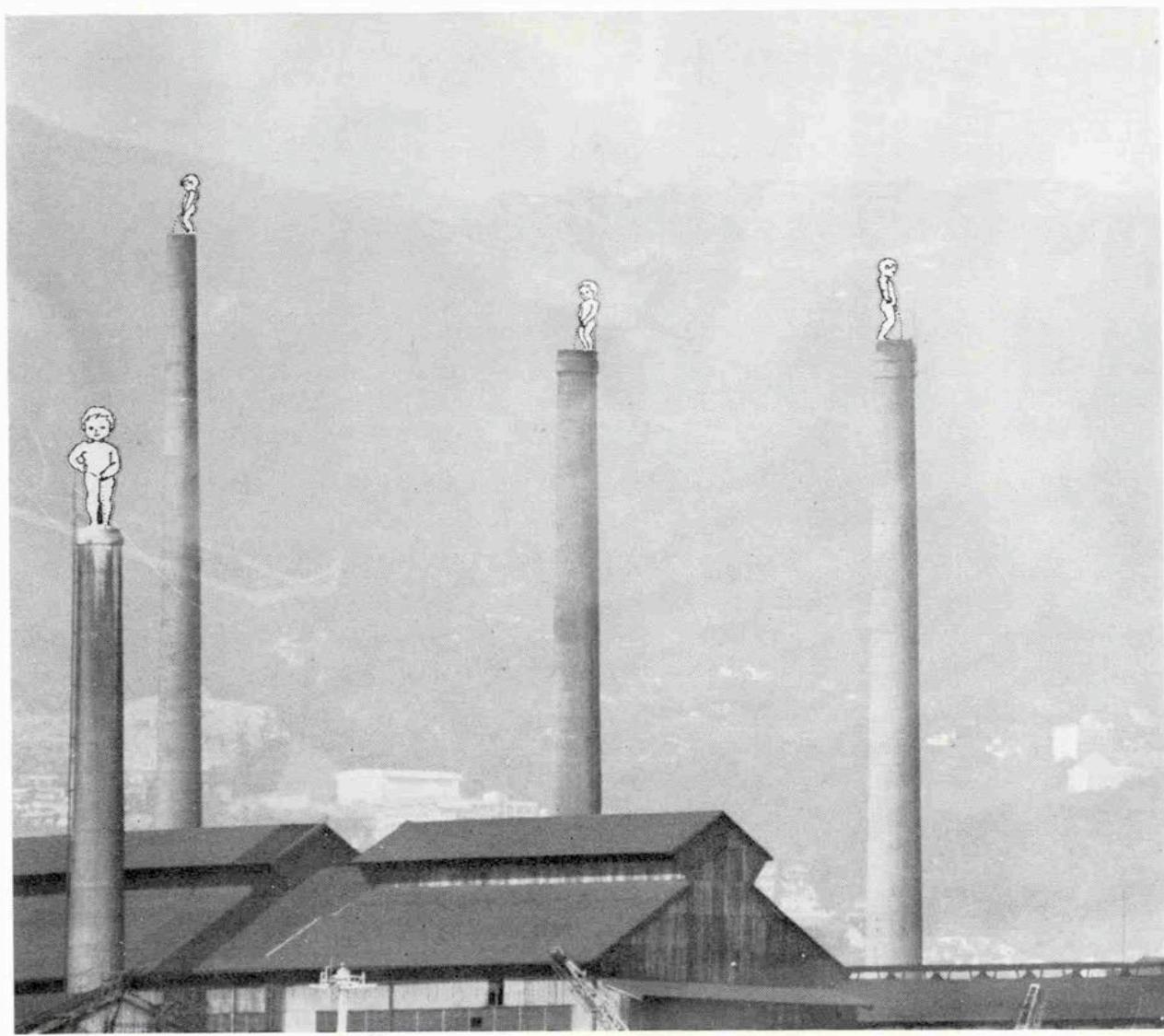


コラージュ コミックス

〈12〉

## 工場街の煙突

岡田 淳



# 淀長立見席 12

## この一年

淀川長治

△映画評論家▽

洋画のこの一年は見ごたえのある作品が珍らしく出揃つた。「ボーア・フレンド」「ラスト・ショオ」「愛のふれあい」が好きだったが、「フェリーニのローマ」「モダン・タイムス」「時計じかけのオレンジ」は尊敬という意味の名作。「真夜中のパーティ」は黒いダイヤモンド。「ゴッドファーザー」はギャング映画のマイルストン。「フレンチ・コネクション」はアメリカ映画のシャープなタッチ。「フレンジイ」はヒッチコックのすばらしき話術の古典。「好奇心」はそのやわらかな映画文体。「キャバレーリー」はライザ・ミネリとあのグロテスクな司会者の輝ける芸人風情。「わらの犬」「死刊台のメロディ」は暴力と不正へのきびしい鞭。「ホスピタル」は非情非人間世界そのかくらん。「おしゃれキャット」のデイズニイ・クラシックと「ヌービー」とチャーリーのアメリカン・モダン。「わが緑の大地」「大いなる勇者」「脱出」のきびしくも悲しいアメリカの肌。「ジュニア・ボナー」の西部牧童のサンセット。まだ思い落しの作品がある

う。「おかしなおかしな大追跡」やフランス映画の香りを見せた「帰らざる夜明け」も捨てがたい。思えばこの一年は多彩であった。「ニコライとアレキサンドラ」や「クイーン・メリ、愛と悲しみの生涯」も実力を示した歴史映画の秀作である。

これらの多くの作品で、チャップリンの「モダン・タイムス」（一九三六）が今に鮮やかに生きていることの偉しさ。  
「ゴッドファーザー」は映画の歴史の中にあらゆる意味でマークをつけた問題作であった。映画そのものの良さ、これにはすこし疑問もないではないが、あの小説をこのように映画の中に生かしこんだわざは認めねばなるまいし、アメリカ映画がアメリカのイタリア移民のしかも暗黒の連中をかくも悲哀の目で見つめたことで、ここにギャング映画が持ち得なかつた、あらたなる暴力への否定が、家族劇の中に語られたことで、これは大衆の心をつかんだのである。

愛のふれあい

フェリーニのローマ

モダン・タイムス

時計じかけのオレンジ

ゴッドファーザー





フレンチ・コネクション

フレンチ

キャバレー

わらの犬

ジュニア・ボナー

私としては「モダン・タイムス」と「ボーイ・フレンド」の二作が最も心を打った。私自身が映画の古典派ゆえであろう。「ボーイ・フレンド」はすいぶんとほめすぎて、叩かれもしたが、やはりあらだけのダンスのムードを見せ得たダンス映画はそうあるものではない。けんらんたるダンスのノスタルジイ。

酔わされたのは「フェリーニのローマ」と「時計じかけのオレンジ」。美術とはこれであろう。

「フレンチ・コネクション」は、そのころ同時に相前後して封切られた「ダーティー・ハリー」とその力量を競い、その映画構成のたしかさでは「ダーティー・ハリー」が上をゆくであろう。しかし「フレンチ・コネクション」のいきさが勝った。「フレンチ・コネクション」には男の魅力がいかにも鮮やかだ。

これらの中からさてベスト・テンを擧げるとなると私はまだ手が出ない。迷う。困る。

「フェリーニのローマ」「モダン・タイムス」「時計じかけのオレンジ」「フレンチ・コネクション」「真夜中のバーティー」「フレンジイ」「死刑台のメロディ」「ゴッドファーザー」「大いなる勇者」「キャバレー」ここで打ち切れば「ジュニア・ボナー」がはみ出してしまう。「ボーイ・フレンド」はあくまでも私ひとりの好きな映画であつて、ベスト・テンは映画構成上のつびきならぬ見事さの映画の計算といふわけである。

好きといえば「少年は虹を渡る」も好きな映画。「暗殺者のメロディ」と「ひきしお」は特に見たかった映

画。そして見てじゅうぶんに楽しんだ映画。しかしベスト・テンの作品をあげるためにこの一年を思いかえしたときには妙なことにこの二作品は頭からはみ出してしまっていた。

もつともがつかりしたのはソビエト映画の「情熱の生涯・ゴヤ」だった。逆に思わずる収穫は「さらば美しき人」。そして「コッちおじさん」もジャック・レモンが監督したということで嬉しく、ポール・ニューマン監督の「わが緑の大地」これはまた堂々たる本格の監督作品でニューマンの映画への趣味をあらためて私は讃美したくなつたのであつた。まだ思い出すと「愛の狩人」「恋」そして「さすらいのカウボーイ」「愛はひとり」もありましたね。

やがてベスト・テン選びの日も近い。今年のこの収穫に当つて私は今から嬉しい悲鳴をあげている次第である。そして今年じゅうにまだ見る作品もあるう。すでに私はキャロル・リード久し振りの名作「フォロー・ミー」が今年ぎりぎり年内登場の事を忘れかけている。「フォロー・ミー」の見事なるその演出力。いやこれは新春公開らしいから、はみだしても……かまわなかつたのだ。

# 神戸遊戯誌111

## ★神戸の誇り、嘉納治五郎と

田辺又右衛門

前回で日本柔道陣のミ Yun-Hen・オリンピックにおける予想外の成績についての地元柔道家の反省談などを述べたが、これほど国際的に高まつた今日のジユードー熱の最大の功労者はなんといつても日本講道館柔道の創始者である故・嘉納治五郎氏である。同氏こそ日本古来のあまたの柔術の流派を一つに総合して、さらに心技両面に近代的な解釈をほどこして全く新しい意味でのスポーツとしての柔道に結晶させた人であり、現代の世界柔道のいしづえを築いた人にはかならない。スポーツとして柔術を体育としてまた人間完成の道としての柔道に高め

た功績に負うところすこぶる大である。

前号で中島さんと山本さんの写真が入れかわっていました



▲嘉納 治五郎

▼田辺又右衛門



柔道 ② 青木 重雄

手に始めたが、彼はこれを嘉納流と呼び、講道館柔道と称した。この理由について数年後みずから「講道館柔道は古来の柔術を集成し、形を変えて創造したものであるから、天下唯一にして、さらに源というべきものなし。後年にいたり、館員のうちより新機軸を出す者があれば、これ講道館柔道より一流を開くものであるから、講道館何某流と称すべきである」と宣言している。その

頃の門弟には、のちの「四天王」に加わる富田常次郎と

西郷四郎をはじめ山県正雄、白藤文太郎、學習院の体操

教師で相撲の強かった松岡寅男磨などがいた。明治二十

年頃から講道館柔道はようやく世人の注目を集め、旧来

の柔術家の嫉妬と敵対に抗しながらもついに国技の一つ

として今日の隆盛を見るにいたったわけだが、これは一

に嘉納翁の創意と情熱、超人的努力のたまものであり、

また柔道が学校に随意科として、のちには正科として

(終戦まで)採用されたことが大きな力となっているこ

とはいうまでもない。

彼はまた明治二三年を第一回に何回も欧米を旅して、

柔道の普及につとめた。これはさきやかな永昌寺でうぶ

声をあげた柔道を深く研究して行くうちに、防禦術とし

てだけではなくその真理に人間の幸福を発見し、これを

広く世間にひろめて、人類の福祉を計りたいという念願

があつたからであろう。従つて柔道は世界的巨視から眺

められることとなり、嘉納翁だけでなく幾多の先輩の海

外渡航によつていつしか各国に根をおろし、「ジュード

ー」の名は海外に鳴りひびき、たれ知らぬものとなっ

た。昭和二五年フランスのパリで発行された「国際柔道」

にはじつに三十三カ国の柔道団体の組織や道場について

記載されているが、これによつてもいかに柔道が海外に

進出したかがうなずける。とりわけ今日フランス、イギ

リス、オランダ、カナダ、アメリカ、ブラジル、アルゼ

ンチンなどにおける柔道熱はすばらしく、フランスでは

ファンの数は三十万人を超えて、各地に道場が作られて

いるほどである。このようない状態だから、ミ Yun-hen・オ

リンピックで日本が重量級や無差別級で敗北を喫したこ

とも。これほど長年の普及で青い目のジユード一家のな

かにも強力な選手や大家がようやく現われ出した証拠と

して、日本選手の敗北を嘆くばかりではなく、あるいは

逆に柔道の世界的成長のため内心喜んでいことかも知れ

ぬ。そういう意味では他界してすでに三十四年目になる

嘉納翁もあの世からわが意図なれりとひとりほほえんで

いるかもしれない。

一方神戸における明治以後の柔術家（のちの柔道家）

の動きについてみると、開港都市神戸は新しい寄り合い

都市で明治以後急速に町づくりがなされたため、柔術家

の住みつけたのは明治中期以後に多い。それまでは柔術

家の動きはあまりなく、園部一族という剣道家が明治初期

から兵庫村東川崎の一隅で道場を構えていた。柔術家

がめぼしい動きを示し始めたのは明治後期からである。

不遷流の田辺又右衛門（岡山出身）、天神真揚流の小角弥

三次（徳島出身）竹之内流の藤田軍藏らが、それぞれ市中

に遷武館、直武館、精武館の各看板をかけて柔術の指導

とけいことを開始した。なかでも田辺又右衛門範士の活躍

はめざましかつた。彼は明治三十年頃二十歳代で来神し

たが、はじめ永沢町三丁目に骨つき屋を開業すると共に

同所に赤壁道場（のちの遷武館）を設けて柔道をひろめ

出した。この人の柔道は天才的で特に寝わざが得意で当

時の猛者連中と他流試合をしても絶対に負けなかつた。

試合の時彼は三歩しか歩かず、四歩目にはかならず相手

を寝わざに誘いこんでいた。「講道館柔道の嘉納などに

も負けんぞ」と豪語していたが、まさにそのとおりで、

明治、大正両代を通じてたびたび講道館の選手と試合を

しても一度も負けたことがなく、地方型のよいところを

柔道界のために残した。ついには自宅道場の床の間に「天

上天下唯我独尊」の大掛図を誇らかにかかけて日本柔道

界をへいげいしたことは神戸柔道界の誇りだった。もと

もと岡山の古武道である拳骨（けんこつ）和尚の不遷流に

習つてその三代目となつたわけだが、先生は外に出ると

羽織はかまにシルクハットといういでたちで雪駄（せつ

た）をはき、ステッキをついてまさに威風堂々と市中を

かつ歩した。この異彩を放つた姿も今は知る人も少ない

語り草となつた。からだはそう大きくなく、体重は若い

時二十貫ぐらいだった。明治四十年頃諏訪山公園西麓に

できた武徳殿の武徳会兵庫支部の教授となつた彼の後期